

第3講：139 「フラフを立てて」

今回の公開講座では、次の逸話をもとに「おぢば帰り」の意義について考えてみました。

一三九 フラフを立てて

明治十七年一月二十一日（陰暦 前年十二月二十四日）、諸井國三郎は、第三回目のおぢば帰りを志し、同行十名と共に出発し、二十二日に豊橋へ着いた。船の出るのが夕方であったので、町中を歩いていると、一軒の提灯屋が目についた。そこで、思い付いて、大幅の天竺木綿を四尺程買い求め、提灯屋に頼んで旗を作らせた。

その旗は、白地の中央に日の丸を描き、その中に、天輪王講社、と大きく墨書し、その左下に小さく遠江真明組と書いたものであった。一行は、この旗を先頭に立てて、伊勢湾を渡り、泊まりを重ねて、二十六日、丹波市の扇屋庄兵衛方に一泊した。

翌二十七日朝、六台の人力車を連らね、その先頭の一人乗りにはこの旗を立てて諸井が、つづく五台は、いずれも二人乗りで二人ずつ乗っていた。

お屋敷の表門通りへ来ると、一人の巡査が、見張りに立っていて、いろいろと訊問したが、返答が明瞭であったため、住所姓名を控えられただけです。

お屋敷へ到着してみると、教祖が、数日前から、

「ああ、だるいだるい。遠方から子供が来るで。ああ、見える、見える。フラフを立てて来るで。」

と、仰せになっていたので、お側の人々は、何んの事かと思っていたが、この旗を見るに及んで、成る程、教祖には、ごらんになる前から、この旗が見えていたのであるなあ、と感じ入った、という。

*

この逸話に登場する「諸井國三郎」は、山名大教会の初代会長であり、明治20年代に急成長していく天理教の草創期を支えた一人です。

16歳のときに改名して旗本に士官した國三郎は、幕府が解体したあと明治6年（1873）に33歳で郷里へ戻ります。明治の新しい国づくりに寄与するために、國三郎は郷里である遠州の地で農業を基礎とした新しい殖産を目指しました。このころ、吉本八十次という若者との出会いをきっかけに信仰をはじめた國三郎は、明治16年（1883）にはじめておぢばへ帰ります。教祖にお会いしてさらに信心を深め、教えの取次ぎを受けた國三郎は、帰郷して同信の人々と講社を組織します。國三郎は、同年のうちに再びおぢばへ帰り、さらに翌年早々に3回目のおぢば帰りに出立しました。

今回の逸話は、このときの様子を伝えたものです。山名大教会の発祥の地（現、遠本分教会）は、旧東海道の隣接した場所にありました。また、所在地の袋井宿は、いわゆる東海道五十三次の中間地点に位置する主要な宿場の一つです。東海道から船や徒歩で伊勢神宮へ参詣し、高野山、奈良、京都、大阪などを巡る「伊勢参宮ルート」は、明治以降も東海道線が全線開通する明治20年代まで盛んに利用されます。明治17年のおぢば帰りのルートもまた、伊勢参宮のあと青山峠から名張、三輪をまわって奈良や大阪方面へ向かう典型的な旅程の一つでした。

また、中山家の最寄りの宿場となる丹波市は、古くから奈良・

京都・大阪と伊勢・吉野方面を結ぶ交通の要所でした。とくに近世には、奈良盆地を横断する「上街道」の要所として賑わいます。こうした代表的な伊勢参宮ルートに沿っていたことが、少なくとも初期の山名の信仰にとっては重要だったのではないのでしょうか。最初の講社も伊勢参詣との関連で結ばれています。こうした文化や制度を背景にして、江戸時代の社会に定着していた伊勢参りのように、人々が集団で「おぢば帰り」をするようになったのは、むしろ自然の成り行きだったのかも知れません。

また、山名大教会の立地を考えると、ここから東・西・南・北の遠隔地に布教線が拡大していったことも頷けます。教祖には「フラフ」だけではなく、こうした将来への展望も見えていたのでしょうか。

*

『復元』（第4号）所収の「天輪王講社信心道書抜」（明治16年）などを見ると、当時の山名関係の方々の教理解の深さがよく分かります。数日間の旅（このときは、7日目にお屋敷に到着）をともにするおぢば帰りの道中では、それぞれ身の上話や世間話に花を咲かせるばかりでなく、教祖の教えについても互いに語り合い、教理の理解を深める場面があったはずで

北海道出身の筆者は、かつて教会長であった父とともに、何度もフェリーで「おぢば帰り」をしました。小樽を出港して敦賀や舞鶴に到着するフェリーは、30時間以上航行を続けます。丸一日以上船旅をともにし、座敷席に持参した弁当を広げて語り合っていると、いつも笑い声は絶えないのですが、ときには真剣な問題についても話しが及びます。旅の道中では、日常の立場や社会的地位を度外視して、それぞれが一人の人間として互いに向い合い、語り合うことができるのです。

かつて、文化人類学者のヴィクター・ターナーは、巡礼や通過儀礼のような宗教的行為の分析に「コムニタス」という概念を用いました。日常性の構造であるコミュニティに對置される「反構造」としてのコムニタスの経験は、日常生活に疲弊した人々に社会における役割とは異なる「自分」と向き合う機会を与えてくれます。そして、コムニタスの空間で社会／構造から開放された人々は、再び社会／構造に戻って自らの役割を果たす意欲を取り戻すのです。

初期の頃から「おぢば帰り」の団参には、こうした効果や機能がなかったのではないのでしょうか。「フラフ」を掲げて、颯爽とおぢばへ向かう一行の逸話には、団参の喜びと人々の高揚感を感じます。とくに「人類のふるさと」である「ぢば」へ帰り、「月日のやしろ」である教祖にお目通りした人々は、日常に戻ったあとも新たな気持ちで今日を生きる力に満たされたのではないのでしょうか。

*

遠隔地から「ぢば」へ寄せる想いは、この逸話から140年近い年限が過ぎた今日においても、多くの人々に共有されています。おぢば帰りという非日常の空間において得られる経験は、現在においても未来においても、天理教を信仰する人々を支える大きな力であり続けるはずで